

1. 教養（リベラル・アーツ）を高めよう

1 知識と教養

教養人と雑学の大家とは、どこがちがうのでしょうか？ あなたは同じだと思いますか？ もう一つ質問。教養を身につけることと、知識を身につけることとは同じですか？違うとすれば、どこが違うのでしょうか。

「教養と知識」どちらも同じ意味で使うことはありますね。「知識を蓄積する」と「教養を高める」とは、似たようなニュアンスです。しかし、「慎みを忘れた人」を「教養のない人」とは言っても、「知識のない人」とは言いません。「教養」と「知識」では、「教養」の方が、より守備範囲が広いようです。「教養」には人格や人間性、モラルなどの「生きていくための知恵」と関わる「+α」の付加価値がどうやら、必要とされているようです。

2 教養と教養教育

「教養」という語が現在の意味で使われるようになったのは、大正時代、ドイツ語の「Bildung ビルドゥング」の訳語に「教養」が当てられて以降です。ご存知の方も多いでしょうが、我が国は明治期、教育制度をドイツ（プロイセン）から輸入しました。ドイツは、国民学校⇒ギムナジウム⇒大学と進みますが、これに倣った日本の教育制度もおおむね同じようになっています。

国民学校	⇒	ギムナジウム	⇒	大学
尋常小学校	⇒	旧制中学校・旧制高校	⇒	帝国大学
				(明治～戦前)

ギムナジウムは現在の日本の教育制度で言えば、小学校高学年～大学1・2年くらいの学力をカバーする教育課程で、卒業するとそのまま大学の入学が許可されます。同様に日本でも、旧制高校の卒業資格で大学入学は許可されました。

教養（リベラル・アーツ）
liberal arts

モラル
テキスト9章11節「道徳（モラル）について考えよう」参照。

ギムナジウム
日本の中高一貫校にあたり、大学入学をめざすための学校。

帝国大学と戦前の大学
文部省管轄では、設置順（1886年～1939年）に、東京、京都、東北、九州、北海道、大阪、名古屋の各帝国大学があった（他に、朝鮮総督府の京城帝大、台湾総督府の台北帝大）。なお、戦前の大学数は、帝大7校、官立大12校、公立大2校、私立大28校の合計49校、大学進学率は数%でエリートだった。

学都仙台のいわれ
東北帝大が創立された1907年に仙台を「学都」と称するようになった。

教養主義の舞台・仙台
東北帝大教授の阿部次郎が発表した『三太郎の日記』は、当時の青春の書となり、学生必読の書といわれた。その書を通して、大正教養主義（教養を積む生き方を重視）が広まった。

このギムナジウムや旧制高等学校における教育目標が「教養教育」＝「教養人を育てること」＝「社会をリードするのに十分な教養を身につけて専門分野に進むこと」だったのです。

「教養教育」とは大学の予備課程という位置づけで、そこでいかなる専門性にも対応できる基礎的な教養を身につけ、その後に専門性の高い医学部や法学部に進むというものでした。

これとほとんど同じ考えなのがアメリカの「リベラル・アーツ・カレッジ」と呼ばれる大学です。リトル・アイビーと呼ばれるようなこうした名門大学では、専門ではなく「幅広い教養」＝「よきエリートとしての資質」を学び、その後に、メディカル・スクールやロー・スクール或いは研究総合大学の専門課程（制度的には大学院）に進みます。

ちなみに、日本の大学でこれと同じのは、国際基督教大学と国際教養大学の二校だけです（学部としては東京大学や早稲田大学、東北学院大学等々に教養学部があります）。

少し、話が遠回りになりましたが、要するに、どのような専門性にも通用する幅広い学問、人格の陶冶を目指すこと、これが「リベラル・アーツ」＝「ビルドゥング」＝「教養」の位置づけだったと考えて下さい。そして、この教育制度と結びついた「教養」という語が、やがて広く人々に滲透して現在のように使われることとなったのです。

3 教育制度の改革

〔1〕旧制大学から新制大学へ

さて、日本におけるドイツ流の教養教育はその後、二度に亙る制度改革によって大きく挫折しました。その一つが戦後の「新制大学制度の発足」でした。

すでにお話したように、旧制高校（3年）で教養教育を、帝国大学（3年）で専門教育を、と棲み分けされていた教育制度は、新制大学への移行に際して、それぞれの課程が2年に圧縮・統合されて4年制大学となりました。

しかし、それは単に各課程を圧縮しただけではなく、圧縮された一部は新制高等学校に委ねられましたし、また、両者（高校と大学）の間には苛酷な選抜試験が課せられるようになりました。

その結果、受験知識に比重が移り、ゆとりある教養教育＝「学問をすることの楽しさ」は後回しにされてしまいました。いきおい、新制大学

旧制高等学校

英米のカレッジに倣い、5年制の旧制中学校の後の2年制の学校として設置された。その後、帝国大学への予備教育を行う大学予科となり、3年制になった。卒業すれば、帝国大学への進学が保証された。第一高等学校から第八高等学校まであった（順に、東京、仙台、京都、金沢、熊本、岡山、鹿児島、名古屋）。

旧制二高の教授だった 土井晩翠

「荒城の月」の作詞で有名な土井晩翠は旧制二高（仙台）で英語を教えていた。

リベラル・アーツ・カレッジ

全寮制少人数の学士課程教育（4年制大学）で、教養教育を特徴とする。日本人卒業者には、新島襄や内村鑑三、津田梅子、永井荷風などがいる。また、オバマ大統領は2年間在籍で転学、アップルの共同設立者のジョブズは2年間在籍で中退している。

国際基督教大学（ICU）

教養学部1学部で30を超えるメジャー（専修分野）を設けている。

国際教養大学（AIU）

英語集中プログラム→基盤教育→専門教養教育を設けている。

1・2年の教養課程がそれを補填するわけですが、学生にとってそれは「受験教育の焼き直し＝知識の押しつけ」にしか感じられず、また担当する教員にもその理念が伝わらないなどして、「教養教育」は単なる「知識の集積」程度の認識になってしまいました。

〔2〕「大学設置基準の大綱化」（平成3年）とその後

「教養教育」の転機はもう一度ありました。平成3年におこなわれた「大学設置基準の大綱化」です。

この制度改革は、「教養教育」の是正が目的でしたが、こと志と違って結果的には、専門教育の優先、教養教育のばら売り化がおこなわれました。具体的には、国立大学における教養部の解体や、専門教育の1年時導入、教養科目の基礎専門化などですが、こうした改革をとおすことで、「教養」は「雑学」と大差ない扱いを受けるに至りました。

しかしそれが逆に、「専門性はあっても社会に順応できない、教養の不足した大学生」が生まれるという現象を生んでいくことになりました。

そして、現在。再び、当初の目的である「教養」のあり方が見直されるようになりました。いろいろな大学で「教養学部」が誕生したのもその証しでしょう。

では、「教養」はどのように据え直されたのでしょうか。それに答える前にもう一度、教養の始まりに立ち戻って、その意味を確認しておきましょう。

4 教養の淵源

ヨーロッパでは12世紀に大学が生まれました。キリスト教圏で本格的な学問の機運が高まったのは、イスラム帝国が残した大量の古典籍を読もうとしたのが契機といわれます。その頃の欧州人には、ギリシャや古代ローマ時代に遺された文献は伝わっておらず、アリストテレスやプラトン、プトレマイオスといった知の巨人も知られていませんでした。

イスラム圏に遺された古典籍は当然、アラビア語で書かれています。その原典を辿ればギリシャ語に行き着きます。アリストテレスやプラトンと言った哲学の原典は大半がギリシャ語で書かれていますので、古典的教養を修めるにはギリシャ語が必修となります。そこで、大学ではギリシャ語やアラビア語を学ぶのが大前提になりました。勿論、その当時の共通語であるラテン語も学ぶ、それが大学の始まりでした。

時代が下って、ラテン語から派生した各地の言語がフランス語、イタ

新制大学制度

アメリカ教育使節団の提言を基に大学の大衆化(大学進学率15%以上50%未満)をめざして導入された制度。戦前は文部官僚が設置認可を統制していたが、①文部大臣の諮問機関である大学審議会による実質的認可、②専門家による設置認可基準、③設置認可と基準認定の分離(認可しやすくするとともに、アメリカ方式の質保証を導入)に変わった。その結果、1948年度は申請が219件あり、167校が認可された(2010年度の4年制大学数は776校)。大学の大衆化が進んだ一方で、質保証は進まず、課題となった。

大学設置基準の大綱化

日本が高度資本主義社会になったことから、アメリカから規制緩和(構造改革)の要求を受けた。そこで、その一環として大学設置基準の規制緩和が行われた(1990年(平成2年)の大学進学率は、アメリカが60%でユニバーサル化の段階、日本が25%で大衆化の段階)。その結果、大学の数が増え(2010年度の大学数は1990年度の大学数の1.5倍)、大学進学率が増加した(2010年の大学進学率は、アメリカが74%、日本が51%で、日本もユニバーサル化)。その一方で、教養教育の弱体化、質の低下、学習意欲の低い学生の増加、基礎学力の乏しい学生の増加の問題も生じ、それらの改善が課題となった。テキスト1章3節「リエゾンゼミについて知ろう」も参照

リア語、英語、ドイツ語などとして独立しても、共通語としてのラテン語教育は大学教育の根幹として長らく続きました。

ボローニャ大学やケンブリッジ大学、パリ大学など、11・12世紀に生まれた西欧の大学では、リベラル・アーツ（「教養」）を学ぶことが基本でした。共通語であるラテン語とその論述法を学ぶ3科目「文法・論理学・修辞学」と、自然を学ぶ「天文学・算術・幾何学・音楽」の4科目が、知識人としてまず最初に学ぶべき「教養＝リベラル・アーツ」（自由7科）だったのです。

簡単にいえば、どのような学問を学ぼうとしても、すぐに専門課程に進むことができるための「語学的な素養」や「論理的な思考法」そして、それら専門課程を終えて社会にでていくにふさわしい「人格の陶冶」、これが教養教育の始発だったのです。

5 教養とは……

では、教養とは何なのでしょう？ 「教養」の原典に立ち返ったといわれる中教審の答申を見てみましょう。そこでは、教養を

「専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力」である。

（平成14年2月、中央教育審議会・答申）

と位置づけています。

聡明な方には、この説明で十分かもしれませんが、多くの方は「？ ？ ？」と悩んでしまいますよね。もう少し、簡単な例をあげてみましょう。

リベラル・アーツに「ラテン語」があることは先程お話ししました。今なら、さしずめそれは英語ですね。だから、「教養」として世界の共通語＝英語を学ぶというのは理解の枠内でしょうが、でも、「教養」としての「英語を学ぶこと」、それは単なる「共通語」を学ぶこととは異なります。英語を学ぶとは、単にその国の言語を学ぶことではなく、英語圏の文化・価値体系・生き方、哲学そうした英語に関わるもろもろの世界すべてを学んでいくことなのです。なぜ、そういうことになるのか。言語学の生みの親であるソシュールの考えに耳を傾けてみましょう。

プラトン

（前427-前347）

古代ギリシャの哲学者。ソクラテスの弟子。世界は「現実界」とその元になる「イデア界（完全な真実の世界）」からなるとするイデア論を唱え、展開した。その思想は西洋哲学の源流といわれる。

「無理に強いられる学習というものは、何一つ魂のなかに残りはしない」（興味を抱いて学ぶときは、心の張り、能力を自ら発見するようになる）などの名言がある。

アリストテレス

（前384-前322）

古代ギリシャの哲学者。プラトンの弟子。イデアをその人に内在する潜在的可能性としてとらえた。また、物事を質料（基となる素材）と形相（形や姿をもたらしている本質）、動力（運動を起こす作用）、目的によってとらえ、それらを明らかにしようとした。その学問的活動は「自然学（自然科学）」「形而上学（哲学）」「政治学」「倫理学」「詩学（文学）」に及び、「万学の祖」といわれる。「私は敵を倒した者より、自分の欲望を克服した者を勇者と見る。自分に勝つことこそ、最も難しい勝利だからだ」「理性に基づく徳と感性に基づく徳がある」など、名言も多数ある。

プトレマイオス

（83頃-168頃）

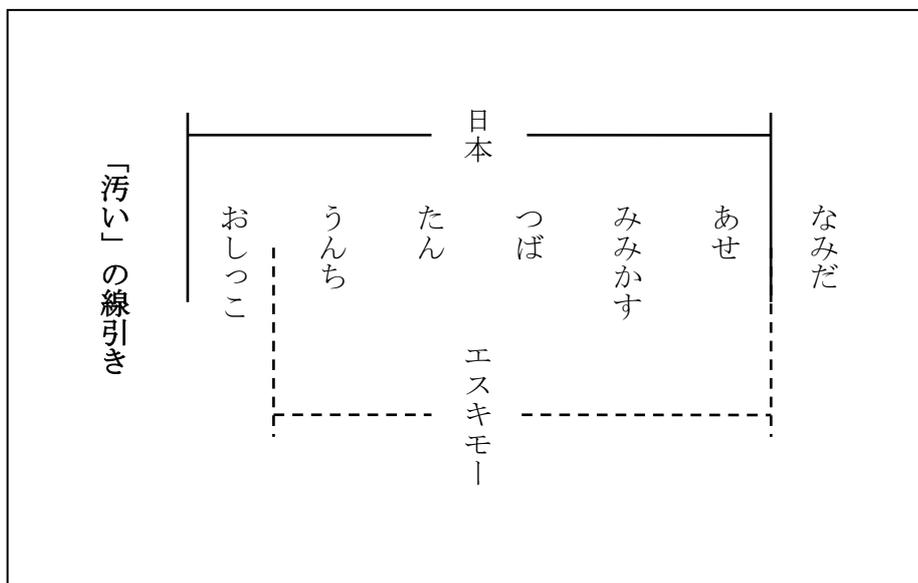
古代ローマの天文学者、数学者、地理学者。

中央教育審議会（中教審）

文部大臣の諮問に応じて教育、学術、文化に関する基本施策について調査審議し、文部大臣に意見を述べる審議会。

【1】ことばを学ぶとは……ソシュールの考え方

すこし難しい話になりますが、言葉の機能を明らかにした人にフェルディナント・ソシュールという人がいます。ソシュールは、言葉のもっとも重要な機能は「切れ目を入れることだ」「言葉とは文化や価値を生み出す源だ」といいました。わかりやすく言いましょう。例えば、「汚い」という言葉、これは「汚い」という範囲を示すもので、「ここから、ここまでが汚いだヨ」と切れ目を入れることだということです。下図を見て下さい。



日本では、「オシッコ」から「あせ」までを「汚い」の中に線引きします。でも、エスキモーは「ウンチ」は「汚い」に入れても「オシッコ」は入れません。何故かと言えば、－40度にもなる極寒の地に住んでいる彼らは、パオ（家）の中にトイレをおきません。外でするのです。しかし、幼い子まで、外に連れ出すわけにはいかないのです。その子が用を足すときは、母親がその「オシッコ」を直接口の中で受けます。日本人は「オシッコ」を『汚い』の中に入れてますから、「ギャー」といいますが、エスキモーは「え？」「なんで？」「どこがきたないの？」です。（平成初期の話ですが……）

自分が考えている言葉の概念は、本人が育てたもの、考えたものではなく、言葉を通して形成されたその国、その土地の概念に過ぎないとソシュールは言います。「美人」という概念だって、皆さんが独自に持っている美意識ではなく、お父さんやお母さん、あるいはお友達やマスコミ

フェルディナント・ソシュール
(1857-1913)

言語学者、言語哲学者。「近代言語学の父」といわれる。構造主義の言語学の立場から記号学を提唱し、言語を記号の体系と位置づけた。「世界は言葉で認識されている」の言葉が有名。

などが「美人」と線引きする中で育った概念なのです。

幼かった皆さんを前に、お父さんとお母さんは「いい子だね」「いい子だね」といいます。お父さんやお母さんに愛されたい皆さんは「いい子」という線引きをその言葉の中から概念化していきます。そして、その「いい子」になることが子どもの希望になります。その子の価値観にもなります。でも、それは、本当は皆さんの価値観ではなく、お父さんやお母さんのものであり、もとを辿ればお爺さんやお婆さんのものであり、そのもとを辿れば……日本の伝統的な文化に行き着きます。

何が言いたいかわかりますね？ 皆さんの持っている「考え」とは、日本語を通して形成された文化や価値観そのものだということです。英語は英語圏が持つ文化や価値観に支配されています。フランス語はフランス語圏の文化に支配されているのです。外国語を学ぶとは、その外国語を通して外国独自の価値観や観念、歴史そのものを学ぶことになるのです。

私たちは、常に「ある時代」、「ある地域」、「ある社会」の中に共通して存在する既成概念に支配されています。私たちはそれと気付かずに自分の考えで行動し、人格を形成していったと錯覚しがちですが、実はその大半は自分が属する「時代」「地域」「集団」によって与えられた考えに過ぎないという事実を「言語学」から証明して見せたのがソシュールでした。

ソシュールの考え方は、やがていろいろな学問領域に敷衍され構造主義を生み出していきました。構造主義的に考察するとは、ある意味で無意識に光を当てることでもあるのです。

〔2〕心のはたらきを解明する……フロイトの考え方

ソシュールと同じように、「心の中の無意識」に光を当てたのがフロイトでした。フロイトが心を意識と無意識の世界に二分（正確には「前意識」の三分割ですが）したのは、皆さんも知っていることと思います。何故彼は「無意識」などという考えを持ち出したのでしょうか？ 第一次世界大戦を経験したフロイトは人間がかくも野蛮な非道な性質を備えていることにショックを受けます。紳士でとても礼儀正しかった人達が、人が変わったように残虐な殺戮をしたり、強姦する姿を目の当たりにして、もしかするとこれこそが人間の本質なのではないか考えるようになります。欲望のままに人間を突き動かそうとするもの、それが無意識の心の動きであって、それは本人すら気づきません。

フロイト

(1856-1939)

精神科医。精神分析の創始者。20世紀の文化と思想に大きな影響を与えた。

「忘れるのは、忘れたいからである」「あなたの強さは、あなたの弱さから生まれる」「たくさんの失敗を重ねてみて、はじめて真実の全体像が見えてくる」「あらゆるものの中心に愛を置き、愛し愛されることに至上の喜びを見出せたとき、幸福は訪れる」など、名言も多数。

仙台と精神分析学

東北帝大教授の丸井清泰は、日本で初めて精神分析学の講義を行い、しかも他学部の学生の聴講も受け入れた。また、精神分析学を一般の人々に広めるよう尽力した。

その無意識を意識の世界に上らせないようにする「フタ」を「抑圧」といいます。普段、人間は「抑圧」の作用によって無意識を意識することはできません。しかし、「戦争」や「夢」、「言い間違い」というものの中に加工された無意識が現れるとフロイトは言います。フロイトと夢分析とが対のように言われるのも、その為です。

フロイトは、ヒステリー患者を専門に治療しました。ヒステリーとは、私たちが使う「ヒステリックな性格」などというものではなく、隠れた心の病のために、それが身体疾患として現れることをいいます。緊張しすぎて吐き気や腹痛などが起きるのもある意味では似たような現象ですね。

フロイトは患者を眠らせて夢状態の中で病理の要因を解明しようとしてきました。カウンセリングですね。無意識を意識化させて、その心の傷(トラウマ)と向き合わせるのです。そうすることで、心の病は治癒していくのです。

ついでに、もう一つ。フロイトは「超自我」という概念も明らかにしました。『超自我』とは、自分の理想像、あるべき姿に自分を導いていこうとするものですが、それは幼い頃の父親の叱責や諭しの中から形成されるといいます。幼い頃から、逃れられない両親の影響下で皆さんの人格は形成された、それすら、私たちは自覚できないというのです。

「無意識に光を当てる」ということが理解いただけたでしょうか？「もしかしたら、今自分が正しいと思っている考えは、間違っているのかもしれない」、そう思えるようになれば、また違った思考・行動が生まれ、新たな世界が広がるのではないのでしょうか。

構造主義的思考はミシェル・フーコーの社会史的考察や、レヴィ・ストロースの文化人類学的考察、更にはロラン・バルトの記号論等々、様々な分野に活用されています。

【3】教養と iPS 細胞

教養とは言い方を変えると iPS 細胞のようなものと言えるかもしれません。iPS 細胞がいろいろな細胞に変わることができるように、教養という考えは生きていく上で、いろいろなところに転用していくことができるのです。先程の説明で言えば、フロイトの無意識やソシュールの言葉の機能という考えは、ただ単に、知識として片付けることができるのでしょうか？自分が意識できていないところでの、「見えない作用」というものを自覚するという事は、生きていく上で決して忘れてはならな

ミッシェル・フーコー
(1926-1984)

哲学者。倫理、道徳などの真理といわれるものが権力の構造の中で形成され、歴史的に変化してきたことを明らかにした。ポスト構造主義(一つの構造が壊されて新しい構造へと変化する社会に着目)に位置づけられる。

レヴィ=ストロース
(1908-2009)

哲学者、社会人類学者、思想家。構造主義を人類学に応用し、人間の無意識の構造こそが普遍的であり、未開人が文化的な生活を送っていないという考え方は偏見と主張した。「民俗学者は対象とする文化への共感と敬意の念から、文化相対主義を打ち出した」などの言葉がある。

ロラン・バルト
(1915-1980)

哲学者。批評家。記号学、構造主義を用いた芸術作品(テキスト)の読み方を提唱した。『聞く』は生理的現象であり、『聴く』は心理学的行為である」などの言葉がある。

iPS 細胞(人工多能性幹細胞 induced pluripotent stem cells)

胚胎外組織を除くあらゆる細胞へと分化することができる万能細胞の一つ。2006年、京都大学再生医科学研究所の山中伸弥教授がマウスの皮膚細胞から初めて作り出した。

い智慧です。これこそが、「知識」ではなく「教養」なのです。もう一度、中教審の答申を引用しましょう。

教養とは「専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力」である。

どうですか？ おわかりいただけましたでしょうか？

「教養」を涵養する「教養教育」は決して受験知識の焼き直しではありません。「教養」の長い文化史と照らし合わせながら、学んでみてください。教養を涵養するにふさわしい本を紹介しておきます。第3章第1節の「読解力を高めよう」を参照しながら教養を高めましょう。

〔筆者お薦めの本〕

内田樹『寝ながら学べる構造主義』（文春新書）
西 研『集中講義 これが哲学！』（河出文庫）
E・H・カー『歴史とは何か』（岩波新書）
加藤洋子『それでも日本人は戦争を選んだ』（朝日出版社）
帯木蓬生『国銅』『三たびの海峡』『水神』（新潮文庫）
浅田次郎『蒼穹の昴』（講談社文庫）

〔教養を高めるためのガイドブック〕

文藝春秋編『東大教師が新入生にすすめる本』（文春新書）
文藝春秋編『東大教師が新入生にすすめる本2』（文春新書）
立花隆・佐藤優『ぼくらの頭脳の鍛え方』（文春新書）
小林康夫他編『教養のためのブックガイド』（東京大学出版会）
宮本輝『本をつんだ小舟』（文春文庫）

〔本節を執筆する上で参考にした本〕

内田樹『寝ながら学べる構造主義』（文春新書）
阿部謹也『「教養」とは何か』（講談社現代新書）
村上陽一郎『あらためて教養とは』（新潮文庫）
清水真木『これが「教養」だ』（新潮新書）

ヘンリー・ロソプスキー（元ハーバード・カレッジ学長）は教養教育の目標として6つの資質の涵養をあげているよ。

- ①謙虚さ（先人の偉大な叡智や思想を学び、自らを過大評価しない）
- ②人間性（人間の本質に対してより深く理解する）
- ③柔軟性（新しい考えや技術を身につけ、変化する社会に対応する）
- ④批判精神（多様なアプローチの可能性を知り、これまでの自らの知識や理解を批判的に考察し直す）
- ⑤広い視野（幅広く学問を学び、自らの体験をより広い視野から考える）
- ⑥倫理的・道徳的問題の理解（倫理的・道徳的問題としてもとらえて、行動や意志決定を行う）

（鈴木健・竹前文夫・大井恭子（編）『クリティカル・シンキングと教育－日本の教育を再構築する』世界思想社、2006より抜粋要約）

